

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月4日(火)
部 会 名	小学校 算数部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善

テーマ

『子どもが主体的に活動する授業を目指して』

提案概要

○算数全単元における取組

基本的に教科書を開かない

教科書を開くことで、話を聞かなくなったり、「わかった気」になったりしてしまう側面がある。自分の力で課題に立ち向かったり、他者の話を聞いて理解しようとしたりする力がつくと考えている。なお、児童が取り組む課題は教科書のものを用い、後で教科書を使って確認したり、復習したりできるようにしている。

授業の流れを基本的に統一する

①学習問題の確認②問題について一人で考える③他者と交流・共有する④全体で確認・共有する
このように授業の流れを統一することで、児童が授業の流れを身につけることができ、「単元や課題が変わってもやることは同じ」というように安心して学習できるようになると考えている。
それぞれの場面に役割があり、繰り返すことで複合的な力がつくと考えている。①一人で考えるための準備。「できるようになること」から脱線しづらくなるための布石。②わからなくても粘り強く取り組む力をつける。③自分の考えを他者に伝えたり、他者の考えを聞いたりすることで、自分の考えや伝え方を修正する力をつける。④学習したことを全体で共有し、自分ができるようになったか確認するとともに、できなかった場合、そこで理解できるようにする。

学びなおしの時間

児童が自分自身の学習状況を振り返り、自らの学習をよりよいものとするために、自分に必要な学習を考え、取り組むための「学びなおし」の時間を設けている。自分が取り組む課題を考えることで、自らの学習状況を客観的に捉え、自分に必要な学習を選択・判断したり、自分に適した学習方法を見つけたりする力をつけていけるのではないかと考えている。また、その取組を見取することで、[主体的に学習に取り組む態度] の評価材料として扱うことができる。

記述の分析

単元の最後に、説明の課題に取り組んでもらっている。児童の記述を分析することによって、[知識・技能] や [思考・判断・表現] の評価材料としている。また、記述の内容がたとえ間違っていたとしても、課題に粘り強く取り組んでいるか、自身が身につけたことをどれだけ表現しようとしているか読み取ることで [主体的に学習に取り組む態度] の評価材料とすることができる。

○第5学年 『四角形と三角形の面積』における取組

学習活動のルーティン化

①公式を覚え、計算できるようにする。②公式の意味について考える。という流れを単元を通して行った。こうすることで学習のリズムができ、学習を進めていく中で児童が「何をすればいいか」を理解し、困ることなく学習活動に取り組めるようにした。

図形を紙で渡す

自分の手で図形に触れて、それを合わせたり、回したり、裏返したり、重ねたりなど操作していく中で、体験的に図形を構成する要素に気づいたり、公式の意味について深く考えてみたりすることができるのではないかと考えた。

質疑応答

質問：

本実践における「公式を覚え、計算で面積を求められるようにしてから、公式の意味を考える」という、教科書とは逆の流れにした意図と児童の反応についての質問があった。

応答：

- ・児童の実態として、学習に困難を抱いている児童が多い。
- ・多様な考えから公式を考えていくことが難しいと考えた。
- ・わからない児童にとって、「できる」という自信をもって取り組んでももらいたかった。
- ・「できた、わかった」という児童が増えた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱：児童・生徒が主体的に学習に取り組む姿とは、主体的・対話的で深い学びを生み出す授業工夫とは

協議に関するキーワード：主体的に学習に取り組む態度を育てるための日々の取組、授業のデザイン・授業の進め方

協議の柱、協議に関するキーワードに沿って、1グループ4名程度で協議を行った。以下、グループ協議の内容を抜粋したものである。

協議の柱①：児童・生徒が主体的に学習に取り組む姿とは

- ・「やりたいこと」「わからない」を言えることが大切。そのための雰囲気・風土づくりが重要である。
- ・わからない子がわかる子に聞く姿。
- ・わかる子、知っている子が他の考えを知り、もっと深く考えるようにすることが大切である。

協議の柱②：主体的・対話的で深い学びを生み出す授業工夫とは

- ・児童の「やってみたい」を引き出す課題づくりをしている。「やってみたい」が対話につながる。
- ・児童が「やってみたい」と思えるような授業を常に考えていくのは難しい。どんな課題であっても「一歩踏み出す、みんながわかる」というマインドを育てていくとよい。
- ・離席を自由にすることで、わからない時に聞きに行くことができる。しかし、わからない子同士が固定されてしまい、議論が進まなくなることもある。
- ・児童の成功体験を増やすことで、主体的・対話的になる。また、教師は「児童ができたこと」を視覚化することが大切。
- ・自分がわかったことを他の人に説明する活動を行っている。その際、わかってもらえた経験を価値づけている。また、わかってもらえなかったことを新たな課題としていくことも必要である。
- ・教師の働きかけとして、児童の意見をつなぐことを意識している。それらを繰り返すことで、児童はいつの間にか自分たちで議論をつなぐようになる。

まとめ概要

本単元を通して、①公式を覚え、計算できるようにする。②公式の意味について考える。という流れにしたことで児童からは「きつこうすればいいんだよ」「どうしたらいいかわかった気がする」「できそう」という声が聞こえ、しだいに増えてきた。また、交流・共有の場面で、児童が自分の考えを積極的に話す姿、相手の考えを意思をもって聞こうとする姿も増えてきた。最後に扱ったひし形では、「わからない子がわかるようになること」に主眼を置いた。一つの考え方を共有することにより、児童だけで公式の意味の説明をつなぐことができた。

日常からの取組を続ける中で一番難しいと感じているのは、「わからないこと」「困っていること」を自分から発信できるようにすることである。「ここがわからないんだけど・・・」「ここでどうしたらいいか困っているんだよ・・・」「ここまではこうだと思うんだけど、どうかな？」など、児童の「わからない」からスタートし、皆でつないでわかっていく授業を目指し、これからも児童が「わからない」と言えるよう、工夫や努力を続けていきたい。